

アートシーンあふれる大学&鳴尾のまちづくりへ

—『みんなのちっちゃなアートボックス』に込めた想い—

Town planning for art scene in MWU & Naruo district

Idea in “Minnano Chicchana Art-box”

三好 庸隆 武庫川女子大学 教授

Tsunetaka Miyoshi Professor,
Mukogawa Women's University



図1 「みんなのちっちゃなアートボックス」周辺の風景（左下はロゴ部分の拡大，撮影：三好庸隆）

概要

本教育・研究誌の前号である「生活環境学研究 NO.8 2020」の「論説・報告」欄に「『武庫女ステーションキャンパス』プロジェクト・ノート」を発表している。本稿は、そのプロジェクトに関連して阪神電鉄 鳴尾・武庫川女子大前駅南に位置する駅前公園において取り組んだ「みんなのちっちゃなアートボックス」に関する報告である。

1. 経緯

「武庫女ステーションキャンパス（以下MSC）」については、前号においてそのプロジェクト経緯を詳細に報告しているように、2019年秋に学院創立80周年記念事業として竣工・オープンさせている。その約半年前に、MSCと並行して西宮市公園緑地課と意見交換を重ねていた駅前公園のリニューアルオープンが実現している。この公園リニューアルについても、筆者はMSC設計コンセプトに連動させて、広場のプログラミング及び具体的デザインについて提案し、実現している。

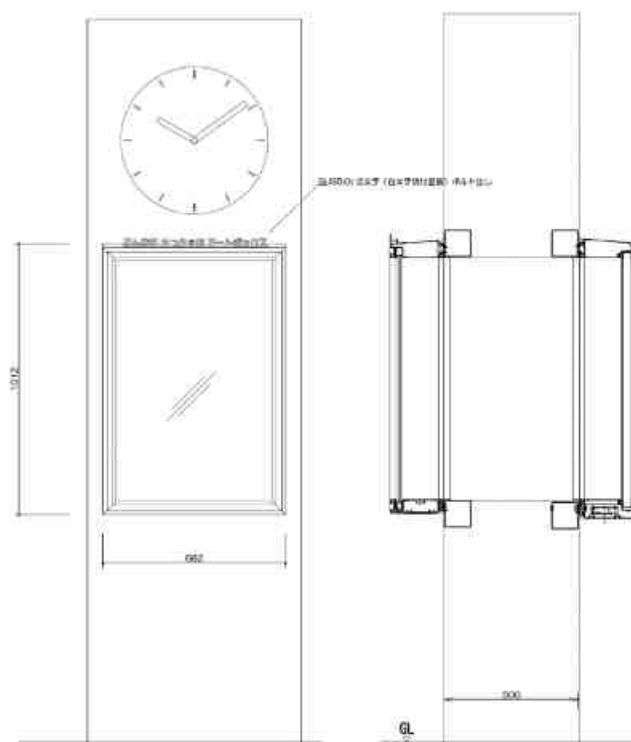
そのような流れの中、MSCオープン数年前から「駅前が女子学園前として大きく変わりそうだ。そのシンボルとして、彫刻などを設置してもらえないか。」とのご希望が鳴尾連合自治会長より本学院に有った。学院は趣旨を了解したものの、諸事情が重なり具体化の進展がないままにMSCオープンを迎えた。その後いよいよ本格的にその話を前に進める必要となり、MSCプロジェクトがひと段落していた筆者に上記“ご希望”の具体化のミッションが回って来た。

具体的に検討する場所としては、既にリニューアルが済んでいる公園に市の時計台が設置されているが、その時計台の中央部に彫刻などが将来置けるスペース（空洞）があり、その部分での検討が条件であった（写真参照）。

2. 「彫刻」から「鳴尾駅前のいわば“世界一ちっちゃな美術館”づくり」へ

筆者が取り組む以前に、シンボルとしての彫刻案として組上に上っていたのは女子学園であるから「（伸びやかな）

キーワード：鳴尾のまちづくり，アートシーン，アートボックス



左図：アートボックス施工前（左）と施工後（右）
上図：アートボックス設計図（正面図及び断面図。ノンスケール）

女性像」や鳴尾地区であることから「イチゴなどをモチーフとした現代彫刻」等であった。ちょうどその年の夏に「あいちトリエンナーレ2019」の「表現の不自由展・その後」（2019年8月1日開幕）が社会問題化していたことから、前者については誤解を招きそうで関係者間でイメージしづらく、後者についても決定打にかけていた。

筆者としても、お金をかけて彫刻を設置したとして、その彫刻の評価・好みは人それぞれであるし、ましてや評価が定まっている現代彫刻の費用はおそらく予算に合わないだろうと思われた。またそもそも論であるが、出来合いのものを設置して終える、ということ自体に抵抗があり、武庫川学院の鳴尾地区に対しての思い入れの表現とはならないだろうと私には思われた。そのようなことを思案しつつ、アートの仕掛けとして考えたのが、鳴尾駅前にいわば“世界一ちっちゃな美術館”を作ろうというアイディアであった。そして、展示内容を継続的に学院側で企画していくことによりアートの側面から学園駅前の特色化へと学院が地域貢献をしていく、と言う考え方であった。この考え方は、鳴尾連合自治会長、当時の西宮市鳴尾支所長、そして学院上層部のご理解・ご賛同を得ることができ実施の方向に進むこととなった。

この企画案は、一回お金を使って終わりではなくて、アート活動としての継続性が求められる。その企画・広報面の継続性の受け皿となることを想定して、「武庫川女子大学のアート環境を考える研究会（代表：筆者）」を学内で既に立ち上げていた（「武庫川学院報」第470号・2020年4月30日発行参照）。

このようにして、企画の方向が定まる。

名称は、学院長からの「いずれは多くの方の発表の場となればいいですね。」とのご意見を受けて『みんなのちっちゃ

なアートボックス』と決定し、アートの展示空間は時計台の空洞部にガラスの展示空間を挿入するようなイメージで設計をしている（設計図参照）。小さいながらも、防水対策、換気対策、正面ガラスの反射対策について十分に配慮するとともに、電源なども備えた本格的な仕様としている。

なお、このアートボックスは学院が鳴尾連合自治会に寄贈する形を取り、連合自治会・武庫川学院連名で西宮市公園緑地課の使用許可を得て施工している。完成後は、連合自治会から運営を委託される形で、学院が運営を行っていく、と言う形を取っている。

3. アートシーンあふれる大学&鳴尾のまちづくりへ

『みんなのちっちゃなアートボックス』は2021年4月9日（金）に鳴尾連合自治会長、西宮市幹部の皆様、学院理事長・学長、その他関係者とともに除幕式を迎えることができた。

記念すべき最初のアート展示は前記研究会メンバーである本学教育学科教授・藤井達矢氏の作品で、およそ半年間展示して、その後は本学美術部や本学アーティスト、地域アーティストなどへのリレー方式での展示を想定している。このような形で、大学及び鳴尾のまちにアートシーンがじわじわとあふれて行くことを筆者としては期待している。

（注）『みんなのちっちゃなアートボックス』の設計ディテールの検討に際しては、本学生活環境学科・北原摩留講師の協力を得るとともにその際1/2検討模型製作については同学科3年太田鈴子さん・島崎咲希さんの協力を得ている。また施工段階では本学施設部の多大なる協力を得ていることをここに記載して感謝の意を表したい。